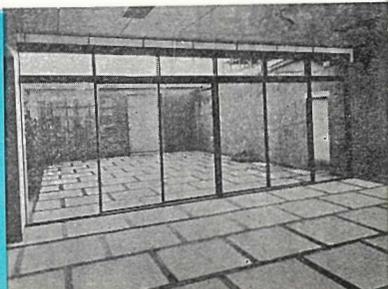


国立近代美術館

上映映画解説

1952 12.1—14



No. 1

フィルム・ライブラリーの発足に当って

前世紀末、映画がわれわれの前に現われてから今日まで僅か六十年足らずであります。その巻戻の跡はまことに目ざましいもので、そこに残された名作の数々は、二十世紀世界文化の貴重な縮図であるといつてもいすぎではありません。しかし貴重な文化財である映画も、多くの場合、商品としてまつかわれ、一定期間の興行を終えると、我々の前から姿を消し、その保存とか後日の活用とかいうことについては格別の考慮も払われないのが常であります。

幸いこの度国立近代美術館設立を機会に、同館内にささやかな試写室を持つフィルム・ライブラリーが誕生し、内外古今の優秀映画の蒐集保存ならびにその活用について努力致すことになりました。

今回は開館記念「美術映画特集」として各国の美術映画を選ば上映致しますが、今後は、往年の名作をも定期的な上映し映画芸術に関心をもつ方々の御希望に慮る予定です。どうぞ御支援をお願いします。

桃山美術 二巻

三井芸術プロダクション作品

- 企画 東京国立博物館
- 製作 三井 高 孟
- 脚本 近 藤 市 郎
- 演出 水 木 荘 也
- 撮影 川 村 清 衛
- 音楽 松 平 頼 則

先に「上代彫刻」を世に送った三井芸術プロダクションが、特異な美術の世界をくりひろげた桃山時代の美術の真髄を描きだそうとした作品である。

桃山時代は、中世から打続く戦乱の終息と西洋文化の伝来によつて、新しい近世文化の誕生を見た時代であつた。そこにはけんらんたる文化の華が一時に咲きみだれ、美術は宗教のきずなから解放されてみずからの自由な世界を歩むことになつた。映画は、まずこの時代相の一端を示し、つづいて巨大な城廓とその内部を飾る美術品の数々を展開する。

狩野永徳・長谷川等伯・海北友松・狩野山楽などの豪華な屏風や棟絵、洛中洛外の庶民の奔放な生活を写す風俗画、さらに大和絵の流れをくんで新しい様式を作りだした宗達の代表作、宗達の指導者と考へられる本阿彌光悦の逸品など、雄大な奔放な時代の風潮を反映した多くの名作がそこに現われ、最後に時流への反省と批判でもあつた茶の世界が提示される。

ピカソ訪問

Vista a Picasso

アール・エ・シネマ社製作
東和映画株式会社提供

監督・脚本・解説 ボール・エゼール
解説朗読 ジェラール・フィリップ

音楽 [ピエール・フロアドピニス]

撮影 [ジャン・レリセイ]
[ピエール・ゲダン]
[F・ロンゲフェルド]

一九五〇年度ヴェニス国際映画祭
ドキュメンタリー映画国際賞受賞作品

フランスでは最近、美術定の生涯や作品を紹介、解説する美術映画が相ついで製作されているが、これはその一篇として、今世紀話題の画家ピカソの、南佛ヴァロリスのアトリエにおける活躍ぶり、アンチーブの古城グリマルデイ美術館にある近業を写している。対象の真髄をついた演出、簡明な画面、周到な解説によつて、ピカソの画業の歴史、生活環境、製作、作品がざざやかに示され、美術を愛好するすべての人々に深い感銘を与えるものがある。ことにピカソが自給具を筆いづばいに含ませ、大きなガラスに得意のデッサンをしていくところは、ピカソの楽しげな表情とともに正しい圧巻である。

監督・脚本・解説を担当したボール・エゼールは、ベルギー生れの美術批評家でこの種の美術映画に専念している人、ほかに「ルノアールからピカソまで」などの作品がある。解説朗読のジェラール・フィリップは、肉体の悪魔、その他でなじみの深いフランス映画界きつての人気俳優である。

アメリカの現代画家

「フランクリン・ワトキンス」

フィラデルフィア美術館製作

米合衆国文化情報部提供
監督、E・M・ベンソン
伴奏、ベートーベン絃楽四重奏4E16番
演奏、バガニーニ四重奏団

この映画はフィラデルフィアにある彼のアトリエを最初に紹介し、次に彼が最初に世間の注目と賞讃を得て共感を得た作品「構成における自殺」と題する作品を紹介する。

次に彼の初期の作風から現在の作品に至るまでについて短い説明がアナウンスされ、同時にカメラは彼がここ三年間取り組んでいる大作「復活」と題する大画面が徐々に完成されて行く過程を映す。

私達の興味を引く点は、彼の肖像画製作の場合を例にとり、最初のデッサンから次に、油彩の下地として白テムペラをキャンバスの上におくところや、更にその上に油彩をおき完成されるまでの技術的な過程を紹介している。彼はこのような仕事を大作の合間に時々依頼される。

次に映画は色彩映画となり画家の他の活動範囲である風景画、もつと自由な立場で描いた肖像画及び大作のための予備的な仕事であるスケッチデッサン、モチーフのための覚え書きのようなものをとらえ、更に最初に紹介された大画面にもどる。以上で映画の説明は終るが、この映画の最初から終りまでベートーベンの四重奏がすぐれた四重奏団により演奏される。視覚による表現とは切りはなして、これだけでも大変な美しい映画である。

なおワトキンスについて云えば、彼はフィラデルフィアに生れ、其処で育つた画家であり、若い頃欧州に学んだ。作風から云えば広義のロマン派に属する。彼の作品の中には人間の情熱、苦悶、挫折した意志希望及びさまざまな人間の感情がはげしい劇的な調子で語られている。と同時に絵画表現の個々の対象の書き方は非常にリアルであり、このリアリズムの自分の中にこなし、自己の感性を表現している。